

資料渉猟余話

その◇

三年ほど前、地域の文化関係事典編纂の仕事をしている中で、飯田市立図書館からある依頼を受けた。それは、郷土史家村澤武夫から寄贈されている「村澤文庫」の中にある、『続伊那歌道史』原稿」という表紙をつけた綴りと、村澤武夫が生前に刊行した『伊那歌道史』等との関係について調べてほしいということであった。

村澤武夫著『伊那歌道史』は、昭和十一年に刊行され、「伊那に於ける歌道発達の概要」(前編)と、四百三十名余の下伊那の歌

人の経歴及びその詠歌をまとめた「伊那歌人伝」(後編)とからなり、「血と汗の結晶」「實に不朽の業績」と讃えられた労作である。

『続伊那歌道史』原稿について

熊谷英彦

さて、村澤文庫の『続伊那歌道史』原稿は、野紙にペンで丁寧に書かれたもので、幕末までの、伊那谷に關わりのあつた歌人百六名(分ければ、下伊那の歌人四十数名、和歌の指導等で来峽した歌人二十数名、上伊那の

歌人三十数名、他)のほとんどについて、一人ずつ経歴を挙げ、詠歌が抄出されている。その順序は、前半は南北朝時代の宗良親王をはじめとして、『伊那歌道史』前編の記述にほぼ沿っており、後半は上伊那の歌人や幕末

の来峽者等である。察するに、「続伊那歌道史」原稿は、村澤武夫が関係諸家を歴訪し、伊那谷に關わりのある歌人の経歴とその詠歌を集め、調べ、整理してきた資料の一部であると思われる。そして、それは、当

然『伊那歌道史』の前編「伊那に於ける歌道発達の概要」の執筆に使われ、下伊那の四十五名分は、後編「伊那歌人伝」の資料にもなっていると思われる。こうした資料に、なぜ『続伊那歌道史』原稿」という題名を付けたのかは、この冊子だけからではよく分からない。が、村澤武夫が『伊那歌道史』の序

言でいうように「伊那」と名を冠したけれども、下伊那に關する資料が思ったより膨大に過ぎた爲め、上伊那の資料は多くを省くのもあり、村澤武夫には、こうした資料を生か

道史』として上伊那のものもまとめ、出版しようという思いがあつたのかも知れない。なお、昭和四十八年に、村澤武夫が担当して、下伊那を中心とした、明治以降の伊那谷歌壇の趨勢をまとめた『歌集伊那―続伊那歌道史』(飯田下伊那歌人連盟編『歌集伊那』四部作の中の一冊)が刊行されている。が、

これは、明治以降の歌道史であり、むろん

『続伊那歌道史』原稿』の資料は、ほとんど使われてはいない。



残された原稿 (村澤文庫)